

Special Essay

ケアするとは

看護学科 益守かづき

看護学生時代にある看護師長さんより言われた「五感を使って観察し、情報収集することが大切」という言葉が、印象に残っている。バイタルサインを測定し、全身状態を観察したことから、身体の変化を読み取る。しかし、その師長さんはそれだけではなく、皮膚感覚を病室に入った時から研ぎ澄まし、子どもや家族が纏っている空気感を読み取ることの意味を話された。Milton Mayeroff の *On Caring* (1990) に「To care for someone, I must know many things.」と記されている。ケアの対象者について言語表現できる方法だけではなく、暗黙に知る、すなわち、言葉で表せる以上に人を捉えることが必要であると示されている。師長さんと Mayeroff の伝えたいところには、目の前に見えるもの、言語で伝えられるものだけに注目するのではなく、ケアの対象者と対面するときを感じるものを大切にすることを示してくれているように思う。

病を抱える子どもや家族は、様々な思いを抱きながら、療養生活を送っている。子どもの場合、自分の考えていることや感じていることを、言葉に表すことが難しい。子どもの思いを、聴覚だけで読み取ろうとすると真の SOS には気づかないかもしれない。家族の本音まで思いをはせることが困難かもしれない。

現在、小児看護技術教育に関する DVD（高知県立大学中野綾美教授監修）作成の山場にいる。この教育 DVD の特徴の一つは、子どもの権利の擁護者となることを、看護学生に投げかけていることだ。子どもは言語的に権利を主張することが困難である場合が多い。子どもの声なき声に耳を傾け、子どもの SOS をキャッチし、子どもを“知る”ことからケアが創造される。しかし、技術の習得過程にいる看護学生は技術を実施することにばかり集中しがちで、子どもや家族に対する行為が“ケア”になっていないことがある。その課題を克服するために作成している自己学習可能な教材である。ここに至るまでには、いろいろな驚きがあった。一番の驚きは、本職のカメラマンや演出家が見えるものを見せる方法と、制作スタッフが伝えたい

ことが必ずしも一致しないことだった。枠すなわちテレビやPC画面の枠の中で伝えるということがいかに難しいかを痛感した。一連の行為をそのまま映像として提供しても、死角があったり、複雑だったり、伝えたいケアが伝わらない。技術を取り出して映像化すると、ケアの要素が伝わりにくい。それだけ、看護師のケアは複雑で、観察・判断・介入方法の検討などがほぼ同時に行われていると考えさせられた。ケアを伝承することの難しさを痛感しつつ、ケアの複雑さを一度解きほぐした上で、複雑化を可能にする方法を学生自身が獲得できるように支援することが必要なのかなと教授方法の一つを示してくれた体験にもなった。

